

イエイツ晩年の詩について

そ の 一

中 山 浩 一

ま え お き

マクミラン社 (Macmillan And Co.) 出版のイエイツ詩集 (Collected Poems of W.B. Yeats) には Last Poems と標記された57篇の詩が掲載されており、これはいわば1889年よりこの詩人の他界した1939年にいたる詩作の総集であり、すでに齢70を超えた文字通り最晩年期のものである。

イエイツ自身も述べているように¹⁾、老年に達してからの詩作はそれ以前のものに比肩し得る評価を得られない場合が普通であるが、詩人がそうした努力を続けているかぎり、われわれ読者はいささかも先人観によってそれを軽視したり、まして無視するようなことがあってはならない。

そこで詩人の全過程を一貫した、広い文脈の中で展望しながら、その晩年の詩を究明の主たる対象にしようというのがこの試論のそもそもの意図である。

論題から多少それるが、彼の芸術がそれ以前の詩の傾向にどう対処するかを最初に見ておくことは、イエイツのような息の長い詩人の場合、ある程度欠かせぬことであろう。

I

The Wandering of Oisín 以来、約50年にわたって築き上げられた詩人の本領と目される数々の傑作は、本論の如き力点の置き方やその評価の推移いかんによって、むしろわき役として補助する結果になることもあるが、論の性格から考えてこれも止むを得ぬことであろう。

Coole Park and Ballylee, 1931 という詩にも “We were the last romantics….”²⁾ とあるが、イエイツは前世紀を通してロマンチズムの主たる後継者であるこ

とを自認しており、その遺産を今世紀まで永続させた希有な詩人であった。しかしながらロマンチズムといえど文芸思想としてはすでに過去のものであり、これをともかく生きながらえさせるためにはそれなりの、現代化ともいわれるべき操作が結果的になされなければならなかった。幸いにもイエイツはアイルランドの伝承や風土・史的変遷といった、この思潮がなお存続し得るに必要な有限の壤土に恵まれ、その芸術に見事な開花を見ることができた。初期のアイルランドの古い物語より抽き出した夢想の世界 Tir-na-n-Og³⁾ より古代史中のイエイツの想像する Byzantium という聖都にいたるまで不断に変容する創作過程も、結局みづからを “the last romantics” と表明せざるを得ない宿命を背負って、曲折したロマンチズムの小路を辿らねばならぬものの必然の成り行きではなかろうか。

だが、その一貫して途切れない完ぺきな変容は余人の追隨を許さず、これまでたびたび読者の絶大な関心の的となってきた。そして、こうしたすぐれた詩の底流に潜む万物に対する無常感は、現世の一切の事実とは裏腹に、常にそれらを超越しようとする方向をとった。言いかえれば、それは人生と時代に対して絶えず大変な関心をおいていた証左であり、あのような大作をものした所以は、周囲の人生と安易に妥協することをよしとせず、それからの解放を、つまり人生の本質的改良を目ざしていたと言える。しかしながら、詩の上でこれらの主題が、どれほど円熟の域に高められても、結局それだけ人生と離反することになり、それから発する苦悩の動揺も大きくなる。われわれはこれらの詩を読むとき、その動揺に共鳴するが、同時に所詮、人生に伴なう宿命はどうしようもないという全く相反した感慨にもとらわれる。イエイツの詩の変容が目覚ましく進展を遂げるたびに、こうした認識も次第に強くなり、前述の「現代化されたロマンチズム」を拡大してゆくのである。

II

人生の最終段階に近づくにつれて、イエイツは老齢という不可避の事実とそれに拍車をかける病⁴⁾に直面し、かつて一度も経験し得なかった緊迫感を帯びてくる。以前の詩では、並の人間を超えた人の介在する世界が主軸となっており、死の恐怖に苦悩する不完全な人間などは全然無関係であった。事実1936年には、“I think profound philosophy must come from terror. An abyss opens under our feet,…….”⁵⁾と電波を通して告げている。

あの偉大なる詩の作者も、幾度か悪化する病気を経て死期の近づくのを悟り、次のようにおびえるのである。

Because there is safety in derision
I talked about an apparition,
I took no trouble to convince,
Or seem plausible to a man of sense,
Distrustful of that popular eye
Whether it be bold or sly.
Fifteen apparitions have I seen ;
The worst a coat upon a coat-hanger.⁶⁾

死の淵に立つ時の幻想は上記の最後の二行だが、それだけで十分その凄絶ぶりをうかがえる。そしてこういう立場は本人自身の体験にのみ依存するもので、余人のあずかり知らぬところであり、「世間の嘲笑も意に介さぬ」ほど切迫した事実でもある。

I have found nothing half so good
As my long-planned half solitude,
Where I can sit up half the night
With some friend that has the wit
Not to allow his looks to tell
When I am unintelligible.⁷⁾

.....

第二スタンザは結局「みずからの孤独」に帰らねばならぬのだが、この広い世の中に、夜半死の淵をのぞく己れのわけのわからぬ言葉を、ただ聞き流してくれる友がいて欲しいという境涯であろう。

When a man grows old his joy
Grows more deep day after day,
His empty heart is full at length,
But he has need of all that strength
Because of the increasing Night
That opens her mystery and fright.⁸⁾

.....

最後の第三スタンザは老年の歡喜がついに空ろな老人の心を充足するが、その条件となるのは老いの身の精一杯の力である。冷厳な現実とは初期ならびにそれに続く逃避の姿勢を現実へと立ち返らせ、實在に向って最後の精魂を傾注する芸術と人生への転進を促す。生の断絶とか終焉は嫌われるが回避できないというところに、そもそもの

悲劇の根底が存するのである。第三スタンザでは、このような悲劇の目前に迫った老人に歓喜が現われ次第に増大してゆくところがあるが、本来悲劇と歓喜は相反するものである故、この辺の事情を考察して見よう。

III

Last Poems 中、第二番目に掲載され1936年に作られた詩 Lapis Lazuli は、この間の推移を説明するのに格好の材料となる。

I have heard that hysterical women say
They are sick of the palette and fiddle-bow,
Of poets that are always gay,
For everybody knows or else should know
That if nothing drastic is done
Aeroplane and Zeppelin will come out,
Pitch like King Billy bomb-balls in
Until the town lie beaten flat.⁹⁾

冒頭の韻律の不調和からも暗示されるように「ヒステリー女」のそそっかしい、かなりたてる調子は、機械文明の代表に価する飛行機やツェッペリンによって、街がこっぴどみにされかねない現状にすっかり頭にきたことを示しているのであろうが、前半と後半で明らかに響きを異にする。これは目の前の事象にろうばいする女の救いようのない態度や口吻とまぎれもない厳粛な悲劇的现实——後半の韻律の落着きで表わされているのだが——との照応なのであろう。しかも嘲笑・愚劣・無知といった最下等な状態にあるヒステリー女の口から、冷やかな抵抗し難い事実が唐突に飛び出すので、悲劇性は一段と苛酷になる。読んでゆく内に、初めの侮蔑的笑いが後で一転し、凍りつくが如き筋肉の硬直に変るのである。

続く第二スタンザはシェークスピア悲劇の舞台の開幕であるが、シェークスピア演劇の概念として、舞台はわれわれ人生の集約的世界であり、登場人物はわれわれの代表に価する。

All perform their tragic play,
There struts Hamlet, there is Lear,
That's Ophelia, that Cordelia;
Yet they, should the last scene be there,
The great stage curtain about to drop,

If worthy their prominent part in the play,
Do not break up their lines to weep.¹⁰⁾

上掲のように、通常のシェークスピア劇と相違して、数あるシェークスピア悲劇中の双へきとも言われる *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark* と *The Tragedy of King Lear* のもっとも中心的な人物が行間に散見される。これらはいずれも、悲劇特有の簡潔化された構図と何事もそのままではすまされぬ危機性、それから観客側の覚えるカタルシスといった圧縮された人生を設定しようとする意図からの流用であって、例のシェークスピア劇に直接結びつかない。「俳優たちが舞台上で大役を演ずるにふさわしい人たちであるとすれば、せりふをとぎらせて泣いたりしない」というくんだり、悲劇的世界にあってハムレット・リア・オフィーリア・コーディリアのように、苦悩しながら課せられた自己の役割を存分に果し得て完全な実存の人になることを指すのであって、第一スタンザのわめきたてるヒステリー女と同格に墮することはまったくないし、まさにそれと対立する生き方なのである。そして、限られた悲劇の場はこの現世であり、舞台上の名優は悲劇性を認知しながらも、この世における生の根底を追求して止まない人に相当するのである。だから、かような人たちは激しい感情を内包するが外に現わさず、したがって錯乱による中断もないので、ある種の充足を感じる。以上のように、精一杯つとめを果したそうしている時に達する境地は、次の行間に記述されている。

They know that Hamlet and Lear are gay;
Gaiety transfiguring all that dread.
All men have aimed at, found and lost;
Black out; Heaven blazing into the head:
Tragedy wrought to its uttermost.¹¹⁾

「陽気があゝの恐怖を變形させる」とあるが、つまり悲劇の逆転であり、「明りの消えたあとの暗黒」と「天があかあかと燃えて頭の中にはいってくる」ことの認識が同時に到達し、死する運命の人間にとって悲劇が歓びになるのである。その契機となる言葉は“Black out”で、暗黒での突如の変転が以上の達成を可能にすると思伝の中にも記述されている¹²⁾。

「すべての人はそれを求め、見だしそして見失った」や「悲劇はぎりぎりのところまでつくり上げられる」は、すさまじいまでの人生に対する苦闘の遍歴をうかがわせる。

Though Hamlet rambles and Lear rages,

And all the drop-scenes drop at once
Upon a hundred Thousand stages,
It cannot grow by an inch or an ounce.¹³⁾

舞台では、「ハムレットがおう恼しリアが怒り狂い」やがて幕が下りても、それだけのことで悲劇そのものに何の影響も与えず、ただ開幕と終幕の反覆がこの世に存するだけなのである。

軽快なテンポの下第三スタンザは、さまざまの文明の盛衰とすばらしい美術品のはかない運命を物語っている。

On their own feet they came, or on shipboard,
Camel-back, horse-back, ass-back, mule-back,
Old civilisations put to the sword.
Then they and their wisdom went to rack:
No handiwork of Callimachus,
Who handled marble as if it were bronze,
Made draperies that seemed to rise
When sea-wind swept the corner, stands;
His long lamp-chimney shaped like the stem
Of a slender palm, stood but a day;¹⁴⁾

結局、これは第二スタンザの最後の行 “It cannot grow by an inch or an ounce.” を具体的に例証して歌い上げているのであるが、第二スタンザの荘重な調子と第三スタンザの、たちまち行き過ぎる快調さは見事な変容である。しかしながら、詩中より類推できるわれわれを取り巻く非情な世界の永ごうの原則に震撼を禁じ得ないであろう。

All things fall and are built again,
And those that build them again are gay.¹⁵⁾

なお、破壊と創造は反覆する。しかもこれら美術品の作り手は、先の悲劇を演ずる名優と同様、歓びを知っているのである。

IV

この詩の題名 *Lapis Lazuli* というのは邦語で「瑠璃」と書かれ、次のようにイエイツの解説した書簡がある。

“someone has sent me a present of a great piece carved by some Chinese

sculptor into the semblance of a mountain with temple, trees, paths and an ascetic and pupil about to climb the mountain.”¹⁶⁾

第四スタンザは送られた石の彫刻の呈示に終る。

Two Chinamen, behind them a third,
Are carved in lapis lazuli,
Over them flies a long-legged bird,
A symbol of longevity;
The third, doubtless a serving-man,
Carries a musical instrument.¹⁷⁾

三人の支那人がきざみこまれ、初めの二人の頭上に長寿の象徴の足の長い鳥が一羽飛んでいる。そして召使いらしいもう一人は楽器をもっている。

さしづめわれわれ日本人ならば床の間に飾るところであろうが、イエイツはこれに例の独特の意味を吹き込んでいる。

“Ascetic,, pupil, hard stone, eternal theme of the sensual east. The heroic cry in the midst of despair.”¹⁸⁾

イエイツの眼には、単なる石ではなく一つの象徴として映り、下の引用にある通り、石の肌のしみ・き裂・凹み・降雪・桜や香気を放つすももはわれわれの居住する世界である。

Every discoloration of the stone,
Every accidental crack or dent,
Seems a water-course or an avalanche,
Or lofty slope where it still snows
Though doubtless plum or cherry-branch
Sweetens the little half-way house
Those Chinamen climb towards, and I
Delight to imagine them seated there;
There, on the mountain and the sky,
On all the tragic scene they stare.¹⁹⁾

石には人生の傷痕がきざみつけられ、その中を三人はたゆまず登って行くのである。

「絶望の最中の英雄的な叫び」（注18参照）とは、かような必死の試練をいうのであろう。

One asks for mournful melodies;

Accomplished fingers begin to play.

Their eyes mid many wrinkles, their eyes,

Their ancient, glittering eyes, are gay.²⁰⁾

「山腹のささやかな休息所」の光景と「山と空・人生のすべての悲劇的場面を凝視する」「彼らのしわにうずもれた眼」は一見なごやかに見える。だが「練達の指が奏でる」「悲しい調べ」や彫刻された不動の鋭い凝視の姿態を崩すことなく、この世の越し方行く末を見つめる様子には異常な緊迫感がただよう。しかもその輝く眼の奥底には歓喜がうかがえるのである。

“But no, I am wrong, the east has its solutions always and therefore knows nothing of tragedy. It is we, not the east, that must raise the heroic cry.”²¹⁾

どうやら、死すべき運命の人間は悲劇をよろこび、歓喜する人は死を恐れないといえそうである。いわゆる東洋の悟れる人たちを考えているらしい。

東洋では、その風土に根ざした伝統や文化を通して永ごうの原則に臨む。上のようにイエイツも、「東洋には常に解決があり、したがって少しも悲劇を知らない。英雄的な叫びをあげなければならぬのは、東洋ではなくてわれわれ西洋である」と述懐している。

西洋の芸術家に対しては、“tragic joy” はイエイツ詩の初期の高まいなあこがれの仙境ではなくて、ヒステリー女のわめきちらす言葉に暗示されるような、人生によどむ低俗な一切のものにまでひたり切ることを求め、そうして芸術上の達成へと指向させる。しかも、芸術家の高揚された意識の中で覚える「悲劇的陽気」は西洋独自のもので、基本的発祥点となっているのは西洋の英知である。

西洋の伝説に見られる人間中心の悲劇的英雄や芸術をはじめとする文化全般に浸透している知的規準は、まさしく西洋独自の伝統である。こうした西欧の精神的土台では、第二スタンザの俳優たちの演ずる悲劇のような芸術的生活は、通常の人愚かな状態から脱して存在を無量の域にまで高め、死から逃れられぬ人間に歓喜を招来させるのである。

究極の段階に到達する方策は、因習的な宗教または芸術の型式であっても、ともかく人は解決を要する問題と取り組まねばならぬ宿命にある。そしてこの詩人は、東・西両洋の角度からこの課題を眺めながら、西洋こそそれにふさわしい「絶望の最中で英雄的な叫び」をあげることを、上の詩“Lapis Lazuli”の中で、強く望んでいるのである。

むすび

最晩年期にはいつからのイエイツは、病気による肉体の衰えを自覚し、やがて訪れるであろう死を意識して、人間の運命の悲劇性から実在の悲劇的状况へとさし迫った不吉な諸問題を追求して行く。

当然その詩作には、鬼気せる窮極感があらわれ、緊張の中に痛ましくも誠実、率直な最終の自我が露呈される。

往年のロマンチストが不断の統制力と豊かな成長力をあらし一層の飛躍を遂げるのはきわめてまれなことで、生ある中はどこまでも現世を抛り所とする真しな詩人魂の賜物という外はない。つまり、現世には逃避などあってはならないという現実意識が、彼をロマンチストに起りがちな涸渇を救ったのであった。

その現実意識のはじまりは、イエイツでは死の苦悩とか未完成な人間とか人生のどこにでも散見できる無価値なものの探求だった。こういうとるにたらぬものと真に希求さるべき不滅なものといった相反する諸要素の対立は、確固たる自己に基礎をおいた悲劇的現実意識から発したものだけに、見事に詩の素材を永遠に解決へと向かわせる可能性を有していた。

イエイツのこうした能力は、一生を通しての緊張と対立に対する飽くなき努力から成長したもので、一時的な思いつきからの安易な転向ではない。したがって経験や想像力の感動的な呈示にとどまることなく、その鋭敏な洞察力のもたらす詩の課題が絶妙に一致する詩の機構とこゝろ然一体となっているのである。彼の変容が完べきであり古今の読者諸氏に高く評価されるのもうなずける。

しかしながら、イエイツはどの点から見ても、過去のロマンチストではなくて正真正銘の現世に立つロマンチストだった。このことは、あれほどまでに「英雄的な叫び」をあげながらも「悲劇的な陽気さ」を結局は知覚するという、常にある解決が彼を待ち受けている詩的図式——勿論これは恒久的なものではなく、破壊と創造の反覆をたどるのであるが——からも証明されよう。

そして“Lapis Lazuli”からも知られるように、彼は東洋的遺産に多大の関心と深く正しい理解を示しながらも、所詮西洋の実存主義的人間であり、単なる俗世間の一英雄として芸術上の達成へと至難な道を歩みゆく真の詩人の一人であった。

なお、イエイツ晩年の詩には、ここで取り上げた終末的な詩以外に、彼がその人生の最後に踏みとどまった世界に関する多彩な詩が数多くあるが、それらについては章をあらためることにしたい。

〔注〕

- 1) W.B. Yeats: Mythologies, p. 342.
- 2) Collected Poems of W.B. Yeats, pp. 294~5, 183.
- 3) W.B. Yeats(ed.): Irish Folk Stories and Fairy Tales, p. 183.
- 4) Joseph Hone: W.B. Yeats, pp. 389~390, 411, 440, 445, 446.
- 5) W.B. Yeats: Essays and Introductions, p. 502.
- 6) Collected Poems of W.B. Yeats, The Apparitions, pp. 386~7.
- 7) Ibid., p. 387.
- 8) Ibid.
- 9) Collected Poems of W.B. Yeats, Lapis Lazuli, p. 338.
- 10) Ibid.
- 11) Ibid.
- 12) W.B. Yeats: Autobiographies, p. 326.
- 13) Collected Poems of W.B. Yeats, p. 338.
- 14) Ibid., pp. 338~9.
- 15) Ibid., p. 339.
- 16) Allan Wade (ed.): The Letters of W.B. Yeats, p. 837.
- 17) Collected Poems of W.B. Yeats, p. 339.
- 18) Allan Wade (ed.): The Letters of W.B. Yeats, p. 837.
- 19) Collected Poems of W.B. Yeats, p. 339.
- 20) Ibid.
- 21) Allan Wade (ed.): The Letters of W.B. Yeats, p. 837.